

星の思ひ出

理學士 星見小路 虛

花が咲いたやうに天上に星の燦いた夜の野原を二人の友達が歩いて居りました。一人は天文學者でありました。今一人は詩人でした。けれども、そうした美しい星の夜には天文學者も詩人も決して別な世界をもつては居ませんでした。却つて二人の世界は融合した一つの完き世界でした。二人は希望にみちて遠い星の世界に憧憬れて語りながら歩いてました。

K『何ぞ言ふ美しい星月夜でせう。誰にでも江馬修か何かの小説に引用してあるやうな言葉が識らず識らずに出て来るやうな氣がしますね。こう言ふんです——こんな星の美しい夜には踏ばたに踏いて祈つたと言ふ人があると言ふぢやありませんか——そしてこの言葉はカントが言つたと言ふ人もありませんが、あんなカントのやうな哲學者でもこんな美しい感じか浮ばすには居ますまい』

T『そうです。私はこんなに美しい星の夜には、佐藤春夫の小説「星」を思い出さずにはおきません。あの愛すべき陳三ミ同じやうに——そんなに小さな一つでもよ——星の一つを自分の星だにしたいんですね。そうして、その星が可愛く靜かに隣り度毎に「オオ私の星よ」言いたいです。陳三も五娘も益春も又五落の家もみんな今は趾もなくなつたと言ひます。けれども、星の世界ばかりは永遠に残るでせう』

K『星——それは實際の子の救ひでせう』

T『そうです、そしてそれは人の子の導きです』
二人は各々、美しい思い出を呼び醒ました。それは、あまりに美しい思い出であつた爲め、誰にも語らなかつた思い出だつたのです。二人は靜かにそれを語り合つて廣い野の道を歩いて行くのでした。

Tの話

それは幼なかつた時分の事です。それは、たしかに夢であつたと思ひます。けれども、又このやうな美しい星月夜を歩いて居る時には夢ではなかつたやうにも思へるです——確かに夢ではありませんでした。たゞ遠い昔の美しい思い出です。

幼なかつた頃、それは春であつたか又秋であつたかすらも思ひ出せないのですけれども、夕闇につままれて、廣い野原を歩いて居ました。そこから歩いて来たかを全く知りませんでした。又どこに歩いて行かうかも考へませんでした。たゞ紅の夕陽が沈みかゝつた頃から歩いて居ただけです。けれどもやがて夕闇が一面に降りた時に、幼ない私はその野原があまりに廣くそして寂しいと言ふことに氣がついて慄えましました。全く獨りほつちでした、そこを見ては家はありませんでした。人の影もありませんでした。鳥の聲すら聞かぬは出来ませんでした。何かにつかまりたいと思へても、一本の木立すら見出せなかつたんです。悲しい狐獨だけがあつたんです。で私は聲を限りに泣いて見たかつたんです。けれども涙すら枯れて居たんです。——今思ひ出しては恐ろしく

なる位なのです——そしてそれが幼ない私だつたんですね。そして夕闇は益々深くなる一方でした。このまゝこの廣い野原に自分の身體がつめたくなつて仕舞ふのぢやなからうか。そう思ふた時に私の心臓がハタミ止んだと思ひました。

その時です。急に私の睫毛には涙の露が一ぱいでした。その涙の玉にぎこからか光が映つたと思ひました。南の方角からであつたか、又西の方向からであつたか、それはわかりませんでした。けれども兎も角そうした光が宿りました。私は涙を袖ではらひました。するさうでせう、地平線のかなたに大きな優しい星がキラ／＼と一つ輝いて居るではありませんか。たしかにその時に私は思ひました。その光の大きさは月よりもつゞ強いやうだ。

私はもう何も考へるひまありませんでした。もう悦びで一ぱいでした。そして私はたゞその星を目がけて一散に走るのでした。星は『來い、來い』と手招きするやうでした。時々はニツコリと笑つたりするやうでした。私は夢中に走つたのでした。けれども不思議ぢやありませんか。そんなに走つても、走つても、ちつとも疲れると言ふ事はありませんでした。何時間走つたか知りません。けれども、もうたゞ走つて居る事が一つの悦びであつたのです。

だんだん私はその星に追ひ着いて行きました。そして私は實際どんな所を走つて居たのか、結局私の足は地について居なかつたやうです。

導きの星は私の前一間ばかりの所を行くのでした。その星

はラジウムのやうに光つて居るぢやありませんか、私は手をのばして取らうと思ひました。

ピタリと星は止つたのです。と同時にそれは幽かに燃えて居る燈火（びん）でした。窓のすき間からも、夜風にユラユラ燃えて燈火は私の枕（まくら）もきに燃えて居たのです。そして幼い私はその燈火のもこで眠をさまして居ました。なつかしい私の家でした。私の家、その家の一間で安らかに眠つて居たのでした。

夢だつたでせうか。けれども私には夢のやうには思へません。ただ、遠い幼い昔の思ひ出です。

星。何と言ふなつかしい名でせう。それは私の永遠の家でせう。星の光。それは私を自分の家に導く光でなくて何でせう。……………

K の 話

それは遠い少年の頃の思ひ出です。私は友達と二人で耶馬溪地方を旅行した事がありました。何と言ふ村を通つたのか今はその名を思ひ出しません。そうした地上の名前は全く問題ではありません。私はそれを假りにAとBと名付けて置きます。

その旅行中の或日でした。たしかそれは春であつたと思ひます。その一日を私達は美しい景色にみきれながらAと言ふ町からBと言ふ村に歩きました。然しその日は少し出發が遅かつたので、そして途中の景色があまりに私達の眼を惹いた爲めにすつかり途中で日が暮れて仕舞つたのでした。そし

てBは言ふ村まではまだ三里も歩かねばならなかつたのです。山道ではあつたのですけれども、その途中には一軒の家もなかつたのです。で仕方がありません。さうしてもその日のうちにB村まで歩かねければ、宿る事は出来なかつたんです。二人ははじめ勇氣を鼓して歩きました。勇しい唱歌をはり上げて元氣をつけました。けれども、いつかもうすつかり疲れ切つてしまつて居たのでした。いつの間にか二人は全く黙々として宿に着いた時の樂しさや夕餐の甘さや眠りの安らかさなごを夢想して自らを慰めるより他はなかつたんですね。でたゞ疲れた足をひきすりながら機械的に歩きました。さうして何時間歩いたでせう。もう春の夜も九時を過ぎました。突兀として聳ゆる岩山の間をぬつて山坂一つ曲つた時我々は行手に幾つかの燈火を見たのですね。B村です。

その時の悦びを言つたら全く譬えやうもありませんでした。その土地はやゝ開けて居ました。草地がありました。そして、そこにはやわらかな首嶺が繁つて居ました。僕等はもうすつかり安心してしまつたんですね。

『B村だ』

『一人は叫びました。』

『しめた』

『他は答へました。』

『おい休んで行かう、一寸』

二人は同時にさう言つて草原に腰を下ろして居ました。その次の瞬間には二人共仰向きにころがりました。するさう

(二〇)

でせう。二人は全く同時に驚嘆の叫びを發したのでした。

『あ、綺麗な星だ』

さね。事實あんなに華麗な天上の星を見たことは嘗てなかつたのです。全く言葉以上でした。何等の形容も及びませんでした。二人はもうすべへの疲れを忘れてたゞ心も魂も吸い盡されるやうにたゞキラキラと燦く星に眺め入るのでした。

『美しい星。さうして僕等は美しい星を今迄見えなかつたんだらう』

一人は思ひ出したやうにさう言いました。

『そうだ、この美しい星に氣がついて居たら僕等はこんなに疲れては歩かなかつたらうにね』

今一人は答へました。事實。私達はその時はじめて星が輝いて居るのを發見したのでした。然し星は日没からすつと輝いて居たのです。——さうして我達は長い間草原にころがつて星を讚美してゐました。

私はこんなに星の美しい夜にはいつでもあの時の思ひ出を思ひ出すのです。星は人の子の救いだ。——そして、そう私は思いますね。

* * * * *

花のやうに天上に星の燦めいた静かな夜を二人の友達は廣い野に、さまよつて居りました。一人は天文學者でありました。今一人は詩人でした。けれどもさうした美しい星の夜には二人の世界は融合し合つた唯一つの全き世界でした。

(一九二四、一、一〇夜)